第７回網走市選択する未来会議発言要旨（平成３０年１１月９日（金））

～網走市まち・ひと・しごと創生総合戦略におけるＫＰＩ達成状況について、資料に基づき事務局より説明～

●議長

・事務局から説明がありましたが、委員の皆様のほうから、ご意見・ご質問等があれば挙手いただきたいと思いますが、何かございますでしょうか。かなり広範囲になりますので、基本目標ごとにお伺いします。

＜基本目標１　若い世代を中心として安心して働くための産業創出と雇用の場の創出関係＞

○委員

・「市と商工会議所が支援した起業・創業数」の増加はどういった要因があって伸びたのでしょうか。

●事務局

・市の商工労働課と商工会議所では支援メニューを持っており、情報発信を行っているところですが、こうした取り組みが認知されてきて、活用する方が増えてきたことが要因であると考えています。

○委員

・確認ですが、企業誘致の件数が平成 28 年度、平成 29 年度に 1 件ずつありますが、雇用は全然ないのでしょうか。

●事務局

・今回は 29 年度末の成果ですので載っていないのですが、30 年度にはそれぞれ増加する予定です。聴き取りの情報では、28 年度はＮＧＫの工場増設をカウントしていますが、30 年度現在で 10 名雇用、また、工場が稼働する来年度に向けて採用者を募集中と聞いており、もう少し上積みされると思っております。29 年度のバイオマス発電所については、10 月 29 日に竣工となり、今現在で 5 名を採用していると聞いております。

○委員

・若者の就労促進、女性の就労促進の項目について、この就労先というのは、一次産業、二次産業などの割合が分かりましたらお願いいたします。

●事務局

・労働実態調査から数値を持ってきている項目であり、調査で産業分野は掴めていると思いますが、今、手元に資料を用意しておりませんので即答ができません。後日、何らかの形でお知らせしたいと思います。

○オブザーバー

・定住する協力隊員数が０というのは、地域おこし協力隊自体の応募が０ということでしょうか、協力隊はいるが定住していないということでしょうか。

（※定住する協力隊員数の指標は、協力隊の任期終了後に網走に定住する人数の目標値）

●事務局

・地域おこし協力隊として、これまでに２名の女性が流氷館に勤務しておりました。ただし、市が募集している業務と本人がイメージすることが違い、他にやりたいことがあるとして、２人とも協力隊を辞め、網走にも定住しておりません。今現在は、まちづくり会社に１名の男性隊員が勤めている状況です。その方が、網走で就労するかどうかは先のことであります。

・ずっと協力隊員の募集はかけていますが、応募がなかなかない、応募があっても途中で取り下げてしまうような状況です。地域おこし協力隊は、道内は札幌、関東・名古屋・関西の大都市圏から移住して働いていただく制度ですが、最近の都市部での人材不足もあり、なかなかこちらまで来て隊員になろうとする人が見つからないという実情もあります。

＜基本目標２　観光や健康・スポーツなど網走の地域特性を生かした交流人口の拡大関係＞

●議長

・次に、基本目標２になりますが、こちらのほうで何かご意見・ご質問はございますか。

○委員

・スポーツ合宿は、実業団や大学生などの傾向はどのようになっていますか。

●事務局

・詳細に分析した物は手元にないのですが、やはり網走までの移動や宿泊の代金を考えましても圧倒的に企業が多い状況です。

○オブザーバー

・私は首都圏に自宅があるのですが、今年は夏にスポーツはとてもできないような気温であったので、合宿がこの地域であるというのは、選手のことを考えるとすごく良い取り組みであると思う。オホーツクはとても魅力的なところであると改めて感じたところです。

○委員

・合宿は増加傾向にあるのですか。

●事務局

・今年、平成 30 年度は若干減ってしまったところです。平成 29 年度は、先ほどお答えした実業団のほか、ラグビーでいうと大学は、法政・東海・山梨学院・慶應・早稲田・北海道科学大学、陸上では日体大、日大、道内の高校、野球は東海大、サッカーは北海道Ｕ－１４女子選抜、ボートは早稲田大学、スケートは日体大、オリンピック選手も立ち寄られるなどの実績がありました。

○委員

・付随して言えるのは、例えばラグビーは、ここに合宿に来たらマッチプレーでトップクラスのチームが試合できる環境がある。他の競技も同じで、陸上のホクレンＤＣなどもレベルが上がってきて、ここで良い記録が出ている。付加価値がある。これから、大学側がそういったものを求めて来ると思う。

・高校生や若い人たちも来る魅力が何かというと、お金だけではないと思う。ここに来たらこういうレベルの人たちが集まっている、こういう良さがある、というような仕掛け、付加価値をスポーツ団体と協議する場を設けたら良いかもしれない。

●事務局

・ラグビー合宿に来ているのは、東芝、神戸製鋼、コカコーラ、ホンダ、トヨタ、サントリー、リコーなど、ほとんどがトップリーグの優勝に絡むようなチームです。どうしても芝面の制約があり、戦略を見られたくないということで一緒に練習をすることはできないのですが、練習試合をする時に相手が見つかりやすいということがある。例えば北見市や津別町も立派なグラウンドを持っていますので、スポーツ課を中心に、市単独ではなくオホーツク全体で売っていこうと、働き掛けを大学にも行っているところです。

○委員

・増加傾向にあるということで、合宿を収容できるキャパシティにはまだ余裕があるのでしょうか。これからまだ増やそうということであれば、もう少し整備を検討していかなければならないのでしょうか。

●事務局

・ラグビーについては、芝面をこれ以上造成するわけにはいかないため、ほぼ上限の状態であります。宿舎はまだ余裕があると思います。

・陸上については長距離の選手がほとんどで、陸上競技場やプールでも練習しますが、ロードが中心ですので、こちらはまだ受け入れを広げられるのかなと考えています。今年、オホーツク網走マラソンで優勝された方も、大学時代は網走で合宿をされていた方です。合宿では能取のバイラギ林道で練習をされていたとのことで、非常に懐かしかったと言っておられた。そういう交流も生まれています。

＜基本目標３　若い世代が健康で希望に応じて結婚・出産・子育てができる環境づくり関係＞

●議長

・続きまして、基本目標３のほうで何かございますか。

○委員

・私の勤め先の保育園が来年４月に新しい施設をオープンするので、こちらに市から大変な支援をいただいているところですが、今回はまだ数値としては出てきていませんので、また次回以降になるかと思います。

○委員

・出生率が上がっているのは大変喜ばしいことだと思うのですけど、今後の見通し、施策みた

いなものは何か考えているのかどうかお聞かせいただきたい。全国的に減っている状況の中で、前年より伸びているというのは良い傾向にあると思う。

●事務局

・出生率は、網走市では分母が少ないため、全国的な出生率と比べられるかどうか、分析は非常に難しいところです。１２月から来年度の予算編成が始まりますので、さらに重点的に取り組んでいこうということで議論を進め方向性を出していきたいと思います。

・今、統合保育園の建設が進んでおり、そこでは今までなかったメニュー、病後児や病児保育ですとか、市長の公約にありましたネウボラ、子育ての一貫した窓口相談所のようなイメージですが、そういうものもやっていこうということで取りまとめてまいります。

●事務局

・子育て環境の充実は統合保育園も含めこれからもやっていきます。補足させていただくと、これまで比較的、全道・全国と比べて出生率の数値が良いというのは、やはり産婦人科を中心とした医療機関をきちんと維持してきたということが一番大きいことだと思います。それから不妊治療なども、北海道の制度に上積みして市独自の制度を持っております。案外目立たないのですけれども、これまで当たり前にきちんとやってきたことが、この数値に現れているものと考えています。

○委員

・出会いの場の創出というのは、独身の方を引き合わせる機会をつくるということだと思いますが、これまで３回開催されてきたところ、29 年度には２回に減ったというのは、目標の６回とギャップがある気がしますがいかがでしょうか。

●事務局

・29 年度は２回だったのですが、30 年度は今のところ０回となっております。なかなか人が集まりにくいという状況で、私ども行政が直接参加を呼びかけるのも果たして良いのかどうかということもあります。市はそうした取り組みを行う団体に対して補助金を支出しており、できる限りその制度を色々な青年層の団体に周知しているところですが、今現在 30 年度については実現できていないという状況です。

○委員

・なかなか集まらないというのはどういう理由なのでしょうか。忙しすぎるのでしょうかね。

●事務局

・最近の北見市での事例の話を聞いたのですが、ＪＲ問題もあって、婚活列車という企画を行ったそうなのですが、男性は集まるが女性は集まらない、イベントをやろうにも集まらなくて終わる、というような傾向があるようです。

○委員

・網走市自体の人口の構成や、女性の観光客から見た網走市というのも影響するのではないでしょうか。網走の出会いの場に来ていただくには。

○委員

・網走市外から来てもらって参加してもらうという考え方でしょうか。この出会いの場の創出というのは市内の方々同士というのが前提なのでしょうか。

●事務局

・今行っているのは、基本的には市内、近隣の町村が対象です。テレビでやっているような、ツアーのような企画は、数千万円かかるのでとても行うことができない。

○委員

・女性の方が集まらないというのは何かあるのでしょうか。

○委員

・私がやっているお店に来る子たちから、素敵な出会いの場、合コンの場があるといいねという話は聞くので、いろいろなアイディアを考えていただければと思います。網走には素敵なスポットがたくさんありますので。たまに寄港する豪華客船でランチなどやってもいいかもしれませんね。

○委員

・団体でやるよりは小さなグループで行うほうがいいのかもしれませんね。

●事務局

・実態的には、今までに開催した出会いの場は、神社で合コンや、おーろら号に乗ったりというものですが、お見合いではなく出会いというふうに言っているのですが、そういうものに参加しにくいという声があります。例えば、社会教育に参加している中で仲良くなるとか、数年前からは市の職員研修も商工会議所や大空町と合同で実施しているのも、実は出会いを念頭に置いている部分もある。表に出ないことでも取り組んでいることはあります。

○委員

・子育てに関してですが、自閉症気味のお子さん、支援の必要なお子さんが最近目立ってきたような印象があります。網走の場合は、療育の関係の病院がございませんので、美幌町のほうから先生を派遣していただいて色々ご指示いただいています。近隣の美幌町に療育病院はありますけれども、網走でも力を入れて対応いただけると現場としては安心かなと思いますのでご一考いただければと思います。

●事務局

・発達障害、特に言語の発達が遅れているお子さんが増えているのは間違いないようです。美幌療育病院、帯広の緑ヶ丘病院からも専門家に来ていただいておりますが、やはり回数が限られているということで十分ではないという話を聞いています。
・市内に（言語療法の）専門家はいるのですが、どちらかというと失語、高齢者の方に対応する専門家で、子どもに対しての指導ができる方はいらっしゃらない。募集しようとしてもそもそも数がいないということもあるのと、絶対数が足りないかというとそうではなくて、首都圏や札幌圏に偏在していることもあって、地方都市までなかなか来ていただけないという

のが実態です。健康福祉部の方で課題と認識をしておりますので、こちらに来ていただく回数を増やすというのがまず最初だと思いますけれども、対策は検討しているというふうに聞いております。

○委員

・小さなお子さんだけではなくて、発達障害系のお子さんの就学の段階、あるいは次のステージで特別支援学校に行くのかという時も、美幌療育病院では診察にかなり待つことになる。発達障害の状態は子どもたちの発育とともに変化していくので時期を逃しては大変だったりもします。それはこの管内だけの話ではなくて、旭川の療育センターなど限られた特定の施設で保護者の方はずいぶん待たれている。例えば、他市町村とも連携しながら、広域で巡回相談というような形の制度ができれば、保護者の方は非常に助かると思います。

＜基本目標４　東農大、日体大などと連携し、みずから学び「明日をひらくひと」の育成関係＞

●議長

・次に、基本目標４ですが、こちらのほうで何かご意見・ご質問はございますか。

○委員

・全国学力調査について、この担当課の学校教育課は、中学校や高校と直接やりとりをしていたりするのですか。現場に立って問題を見ていたり、何か教育に対するアクションは行われているのですか。

●事務局

・まず基本的な事項として、市が管轄している学校は小学校と中学校になります。
・今、学校教育課では、全国平均との差を縮めようということで、例えばＩＣＴの教育、タブレットパソコンを用意して活用する授業、農大と連携している「寺子屋」という夏休みに学生が教える事業、体力では、日本体育大学の方から講師を派遣していただいて基礎体力の向上などに取り組んでいます。また、昔は夏休みには部活くらいしかなかったのですが、今、学校では定期的に補習授業を行っているという状況があります。
・かなり努力をしていただいているが、全国の競い合いという面がございますので、網走も頑張っていても全国の平均点もまた上がるという状況にありますが、基準年の 26 年度から比べれば、全国平均との差は縮小しており、良い傾向にあるという状況です。

○委員

・全国テストは小学生と中学生が行っていますが、今、課題となっているのは、小学校で学んだことが、中学校に行く接続の学年でいったん途切れてしまう。今、道内でも小中一貫校というのがあり、数日前に当別町長からお話を伺ったのですが、小中一貫校にしたら子供たちの学力が全国平均を上回ったそうです。大きな要因が、教育の中身よりも、中学校の先生に代わる、教科ごとに先生が変わると子どもたちがドギマギしてしまう、先生に慣れているだけでかなり違うそうです。ここにもヒントがあって、現場の先生方に負担を掛けたいわけではないですが、接続学年、小学校と中学校とで国語や算数などで、まずは先生交流をするだけでも違うのかなという印象を持ちました。

●事務局

・今、委員がおっしゃるように、「中１ギャップ」というものが必ずあって、問題意識を持っており、中学校、小学校の先生も密に連携をしております。

・一貫教育は、話題に上がったことがある程度ですが、非常に効果が上がっているということも知っておりますし、簡単には言えないところはありますが、今後、少子化になってきますので、どこかでそういった方向性も含めながら、除外するのではなく、さまざまな検討は必要なことだと思っております。

●事務局

・先ほど委員からも、現場を見ておられるかという発言がありましたけれども、小中一貫校については、内々に議論されている程度です。学校の実態を見ますと、小学校の先生と中学校の先生がいて、小中一貫がいいのか、斜里町のように義務教育学校という仕組みがいいのか、そこは現場の先生方の考え方にもかなり影響があると聞いておりますので、制度も含めて、学校教育部ではどのような可能性があるのか、網走にはどれがフィットするのか研究レベルですけれども考えている段階です。

○委員

・完全に小中一貫を展開していくとまではいかなくても、小学校から中学校に視点を開かせるといいますか、小学校から中学校を見るだけでも何か新しいことが得られるのではないかなと思います。

○委員

・視察に行かれたのは、公立ですか、私立ですか。

○委員

・公立ですが学校に視察に行ったわけではなくて、当別町との連携協定の際に伺った話です。

・道教委から聞いた話ですが、中学校の先生に教わった小学生は、ちょっとハイソになったかなという気分になる。そして、その中学校の先生の顔を知っているというだけで緊張しないと。そういう部分で、先生方にもそんなに負担を掛けない中でも、交流して教え合うという学びの場を設けるというのも面白いと思ったところです。

○委員

・高校・大学で、大学の教員が高校に行って教えるとそこで新たに視野が広がるということがあるので、小学校・中学校、中学校・高校の連結というのも、それと同じことが考えられますよね。

・網走は大学もあり一貫して教育を受けられるというのが、地域のお子さんには見えていなくて、農大だけは途切れているところがあったりしますので、そういうつながりがあればいいと思います。

○委員

・孫の話ですが、先ほど話に出てきた「寺子屋」に行っており、行くと農大の学生に非常に親切に教えていただいているようです。学生には時間の制約もあるのでしょうけれども、そう

いうような場をもう少し積極的に、小学生・中学生と関わりを持つ場を広げてもらえると大変ありがたいかなと思っています。「お兄ちゃんに勉強を習いに行く」と子どもが喜んで行っていますから、そういうものを大事にしていただきたいという希望を持っています。

○オブザーバー

・ご報告をしておきたいのですけれども、地域に定着する人材の確保、農大卒業就職者の市内就職者数のところなのですが、昨年、当公庫のほうで協力をいただきながら、就農についての調査をしたところ、数十人単位でオホーツクで農業をやりたいという子どもがいるのだけれども、なかなかマッチングしないというところが一つの課題です。それは、農家側の課題と学生側の課題があり、今、学生とチームを作って共同で調査をして、色々な農家を回っている最中です。その結果やこうすれば就農に結びつくというようなものを今年の１月に発表する取り組みを考えておりますので、その時期にはご案内できると思います。

●事務局

・農大の学生が卒業する時に地域に残りたいという声は結構多いという話は聞いていました。例えば農業に従事したいという場合に、網走の事情ですけれども、かなりの大規模農業を大型機械を使って行うということで、いわゆる畑になっていない耕作放棄地のようなものもないという、新規就農がほとんど可能性として難しい状況です。ただ、水耕栽培のような農地を使わないのであればどうかというチャレンジもあるのですけれども。

○オブザーバー

・新たな農地の開拓ではなく、農業に就農するとか、担い手の後継者みたいなものもなかなか難しい、そのあたりもどうマッチングするかということもあるかもしれない。

●事務局

・それから、研究していたことを活かせるような就労の場があるかというと、それもなかなか難しいので、総合戦略にも書いてありますけれども、そこが網走の課題ということで、そのため製造業であったり、一次産業に付加価値をつける取り組みを行っていかなければならないということを課題として認識しています。

○委員

・他人事とは思えないです。今、一番就農に近い立場にいるわけですけれども、どうしても担い手になるということは、よそ様の農家にお邪魔して取って代わるみたいなイメージがある。農家さんがどういった点を求めているかに農大生が気づいて、そして、どういった手続きをすれば、北海道のために、農家のために働けるのかという、綿密なやり取りがあればこその就農だと考えています。

○委員

・東農大の学生もそうですれども、東京から支援校に来た生徒の中で、網走で農業をやりたいと言っている子が今いるのですよ。その時に、この地域は一次産業、農業も全部潤っていると思うんですよ。そうすると就農したい子たちが、障がいのある方もない方も、ここに居たい方が、ここで農業をするだけではなくて、稼いで収入に結び付く生活の基盤をつくるとい

う話になったら、これは全く新しいスキームづくりが必要ですよね。それは農業をやっている方たちの基盤を荒らさないで、水耕であったり、金になる物は何かであったり、それをどういう形でやっていけるか。（支援校には）農業をやりたいという子と酪農の勉強をしたいという子がいるので、あまり大きなことは言いませんが、その子たちがここで生活して、出会いもして、販路も開いて、生活の充実につながれば面白いと思う。そういうようなことを、市だけではなくて、行政を動かしていければと思う。

○委員

・農業生産に直接関わるだけが農に関わることではないので、それに関連するようなものがあればと思います。

・それから、農大の職員として思うのは、結構リターンして来る人、一度市外に出ているのだけれど帰ってきている、そういう方はこの農大卒業者の市内就職者数には含まれていないですよね。

●事務局

・カウントのしようがないので入っていないです。

○委員

・何年か経ってみて網走が良い、オホーツクが良くて帰ってくるというような方も計れたら、またちょっと違った結果になるのかなと思う。なかなか計りづらいところもあるとは思うのですけれども。

●事務局

・同じように移住も実績が出せないのですけれども、網走は農大もそうですけれども、色々な官庁がありまして、戻って住んでいる方はいるんですけれども、行政としてはカウントのしようがないのです。小さな村とかでは、あの人が来たと移住の成功例としてすぐに分かるんですけど、実績値を出すのは難しいですが、網走でもそういう方は相当いらっしゃいます。

●事務局

・先ほど話の出た今はいない地域おこし協力隊の方ですが、東農大を卒業して、本州の理系の会社に勤めて、やはりこちらが良いということで網走に一旦戻ったのですけれども、やりたいことが博物学的なことだったので、就職してもう少し北の方に移って行かれたり、市の職員でも、数は少ないですけれどもＵターン組というのはいます。

＜基本目標５　支え合い、安心して暮らすことができる共生型地域社会づくり関係＞

●議長

・最後、基本目標５で何かご意見・ご質問はございますか。

○委員

・特定健康診断の受診率が下がってきていますね。ちょっと気になるのは、後期高齢者になって、介護保険だとかそちらのほうにも影響するのではないかというふうに思うんですけれども、促進する働き掛けをもっとやるような施策があったら教えてください。

●事務局

・今現在取り組んでいるのは、健康マイレージというもので、特定健診を受けるとポイントがもらえて、それが貯まると野菜と交換できるということで、ベジラブル運動もかけて取り組んでおります。実際には、野菜ではなくて金銭的なものがいいのではないかというような意見もありまして、ただ、行政的には金銭というのはどうかという議論もあります。

・一方で受診率が上がらないというのもありますので、来年に向けて、ここは水谷市長も重点的に考えているところでございまして、もう少し簡単に受診できるような制度が何かできないかというようなことで、来週から、各部長を集めまして検討会議が始まりますので、何か一つ取り組みを大きくしたいと考えております。

●事務局

・数字の見方にもよるのですけれども、市民の方が生活習慣病を予防していないかというとそうではなくて、この率は特定健診に行った方の数です。ところが、高齢の方は特に定期的に病院に通われていて、そこで検査をしている方はいらっしゃいます。そこのカウントはされていないということなので、定期的な通院によって予防に繋げている方のカウントをどうするかということを、実は今、「みなし」というのですけれども、みなし検診としてカウントするかどうか健康推進課で検討しているところです。実態としてはもっといるものと考えております。

○委員

・今のお話を聞くと、一概には言えないかもしれませんけれど、この数値が減ってくることが望ましいのかもしれませんね。

●事務局

・病院にかかっている人が多いということですので、そうとも言えませんが、通院している方が病院へ行ったついでに、後いくらか支払えば検診を受けられるような仕組みができれば、というようなことを今議論しているところでございます。

○委員

・私事になるのですが、健康診断を受けに病院まで行ってお願いしようと考えたところ、なかなか時間帯が厳しかった。私が時間を取れなかったというのもありますけど、どうしても農大からの留学には医療機関の健康診断が必要でして、来年以降、留学候補生の後輩たちのためにご尽力願います。

●事務局

・市民から同じような悩みは多いです。特に働いている方については、平日の受診は難しいですとか、夜間・休日にはできませんかといったような問い合わせがあって、健康推進課のほうではミニドックなどの数を増やすということと、土日に行う、比較的遅い時間、早い時間に検診ができるような工夫はしています。それでも自分の生活と合わない方はいらっしゃるので、診ていただくには必ず医師が必要で、その確保を含めて、地方都市の中では課題になっています。実態としてはそういう状況です。

○委員

・関連してお聞きしていいですか。旭川から来ている移動健康診断というのがありまして、なかなか土日も仕事で検診に行けない、土建や建築の会社などがまとまって健康診断を受けているのですよ。そういったものはこの中にはカウントされていないのでしょうか。

●事務局

・職域で、自前で検診の場を設けて、そこに従業員を行かせるということは、行われていると思うのですけれども、あくまでも一般、国保の方が検診に行くカウントだけです。

○委員

・そうなるとこの比率はかなり変わってくるかもしれませんね。実際、受けている方はかなり多いです。

○委員

・いせの里でも、職員が多くて夜勤の者もいるので、検診車が来て特定の日に皆で受けています。

●事務局

・そういうものを積み上げていくともう少し上がっていくかもしれませんが、そういうのはカウントができないのですよね。

●事務局

・それぞれの個人情報になるものですから、基本的に国保の加入者の数字になっています。今の移動検診の話は、市役所も裏にバスが来て一斉に受けていますので、おそらく同じような事業者だと思いますけれども、実態を反映しているかというのは課題だというふうに捉えています。

○委員

・空き家バンクの登録数は増えているのだけれども活用数がないという、このへんのギャップというのは何か課題点というのはあるのでしょうか。

●事務局

・この「空き家の利活用件数」というのは、総合戦略を作った時に、具体的には、ご存知の方おられるか分からないのですが、向陽の入口に昔から古い住宅、壁が一部なかったりというような放棄された家が何軒かございまして、そこのエリアを解体してその後の土地を公園にでも活用できたらということを設定したものが、利活用件数となっております。実際には、市の方でも所有者を探して働き掛けをしまして、２軒ほど解体が行われていますが、ただ、あくまでも個人の土地と家ですので、市がそこを買い取って公園にしたりするのはちょっと違うということになりますので、利活用としてはカウントできるものがない状況です。

●議長

・基本目標ごとにご意見を頂戴したのですが、最後に全体を通して何かご意見等ございますか。

・それでは、本日の事務局の説明と、ご質問に対する回答を御理解いただいたということでよろしいでしょうか。以上で本日の議事を終了させていただきたいと思います。ありがとうございました。

（以上）